

一門の運命はや尽き候ひぬ。撰集のある

べきよし承り候ひしかば、生涯の面目

に、一首なりとも、御恩をかづぶらう

存じて候ひしに、やがて世の乱れ

出で来て、その沙汰なく候ふ条、ただ一身の

嘆きと存ざる候ふ。世静まり候ひなば、

勅撰の御沙汰候はんずらん。これに候ふ巻き物

のうちに、さりぬべきもの候はば、一首なり

とも御恩をかづぶつて、草の陰にてもうれし

と存じ候はば、遠き御守りでこそ候は

んずれ。」とて、日ごろよみ置かれたる歌ども

中に、秀歌とおぼしきを百余首書き集められたる

巻き物を、今はとてうつ立たれけるとき、これ

を取つて持たれたりしが、鎧の引き合はせ

より取り出でて、俊成卿に奉る。三位、これを

開けて見て、「かかる忘れ形見を給はり置き

候ひぬる上は、ゆめゆめ疎略を存ず

まじう候ふ。御疑ひあるべからず。さてもただ今

御渡りこそ、情けもすぐれて深く、あはれも

ことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ。」

(平家)一門の運命はすでに尽きてしまいました。

勅撰和歌集の編集がある

だろうということをつかいましたので、

(私の)一生の名誉に、

一首なりともご恩を受けたい(勅撰集に入れさせて

もらいたい)と

思っておりましたが、そのまますぐに世の乱れが

起こって、その(勅撰集を編集する)命令がござい

ませんことは、全く私の一身の

嘆きと思っております。世の中が静まりましたなら

ば、勅撰和歌集のご命令がございました。

ここにございます巻物

の中に、そうする(勅撰集に載せる)のに

ふさわしいものがございませうならば、一首だけ

でもご恩をこうむって(集に入れていただき、

死んだのちでも嬉しい

と思われましたならば、遠いあの世から(あなた様を)

お守りいたしましょう。」

と言って、日頃詠みおかれた歌の

中で、秀歌と思われる歌を百余首、書き集め